平成２４年度　第４回はけの森美術館運営協議会

平成２５年１月２２日（火）

【鉄矢会長】　　では、平成２４年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。よろしくお願いします。

配付資料を確認したいと思います。次第が１枚目で、カラー刷りの物が１枚、それから横組みで表の物が１枚、ホチキスどめの物、はけの森美術館事業予定が１枚、それから多摩美術館で行われた「モノミナヒカル展」の２つ折りの物が１つ。それから「五感の森探検隊」という複数のものをホチキスどめした物が１つ。２５年度予算概要の横組みの表が１つ。これはコゴウチ文庫でよろしいんですか。

【神津学芸員】　　はい。

【鉄矢会長】　　「小河内文庫の蔵書を」というホチキスどめが１つ。資料は問題ないでしょうか。

はけの森美術館運営協議会、定数の過半数ですので成立です。それから今日は傍聴の方がお２人ということです。

では、次第にのっとって始めたいと思います。では、「事業報告等」ということで、事務局からお願いいたします。

【神津学芸員】　　１２月２日に終わりました企画展の鑑賞教室の様子を少しご紹介いたします。展覧会のほかのイベントに関しては第３回の運営協議会で報告しておりますので、簡単に、鑑賞教室が全９校無事に終わりましたということをご報告させていただきます。

全校実施になって２回目の、１つの展覧会に全校来るというパターンで、渋い内容の展示だったのと、裸婦が多いということで学校の先生も少し心配されてはいましたが、各自お気に入りを探しながらじっくり鑑賞していました。特に中村研一の家が描かれていたりですとか、庭の木々が描いてあるものは、絵を鑑賞したあとにその場所に行けるということがとても楽しかったようでよかったなと思いました。石川県に行ったことがあるという子供が意外と多かったので、はるばる来たというところに皆びっくりしているような様子が印象に残っています。

学校の先生との連携を今後、もっとやりとりを密にしないと、というのが今後の課題です。学校によってどれだけ事前に注意をしてくださるかとかいうのがこちらで把握できず、

また例えば学校独自のプログラムをつくったりということは、事前に相談できていればとてもよいのですけれども、どちらにしろ鑑賞に際しての注意ということがすごく多くなってしまったりとか、当日になって慌ててしまう面が出てきてしまいます。こちらとしてもできるだけ積極的に話していかないと、というような反省はあります。

また後で予算の話は出ると思いますけれども、継続して来年度も鑑賞教室というのは事業として実施したいと思っております。

企画展については、内容については以上です。その次に入館者数は、今年度は２０日間、年度末の３月末に所蔵作品展が開館日としてありますけれども、それ以外の展覧会ごとの人数というのが集計されておりますのでご確認ください。３つの展覧会と１つのワークショップですけれども、並べてみると夏の展覧会での子供の入館者数が多いというのがわかるかと思います。一応こういう実績があるということで、来年度に関しても夏休みの所蔵作品展に関しては小中学生を無料にしたいという希望があります。開催済みの事業については、以上です。

【鉄矢会長】　はい。もし補足説明がございましたら。

では、委員の皆さん、何かご質問等、あとご意見等ありましたら。感想でも構いません。

【村澤委員】　今年度の予算というのは大体幾らぐらいだったんでしょうか。

【鉄矢会長】　２４年度ということですか。

【村澤委員】　２４年。要は、私の個人的な興味という部分もあるんですけれども、１人当たりどのくらいかかったのかなというところをちょっと知りたいなと思います。

【事務局（山田）】　当初予算はこの資料の右側に入っています、これが２４年度で、来年度は…。

【村澤委員】　４,４００万。

【事務局（山田）】　はい。

【村澤委員】　で、４,０００人。

【鉄矢会長】　入館者数なんですけれども、２４年度、４,０７０人ということで、今後３月末に若干のプラスアルファは見込めるところだとは思うんですが、昨年度と比較するとどれぐらいの違いがあるのかというのはすぐに出ますか。

【荒木学芸員】　昨年度と今年度ではいずれも改修のための休館期間がありまして、その期間の長さがちょっと違うので、単純に数値だけの比較はちょっと難しいかと思います。

【事務局（山田）】　ざっくりで、うろ覚えで申し上げますと約８００名、昨２３年度の

ほうが多いです。昨年度は企画展が２本ございましたので、その部分での、特に『朝倉文夫の猫たち』展の入館者が多かったというのがございました。

【鉄矢会長】　　感想です。私は、昨年度の「料理して妻を待つ」というのは、非常に何か話題になった感が高かったのがこの入館者数にも響いているのかなと。一方で、企画展の石川県立美術館のほうは、実は話題性はあまり聞こえなかったんですけれども、物としては非常によかったと思っています。返して言うと、ここのところがもう少しうまく、渋好みなのかわからないですけれども、うまく何かに載せるとやはり１,０００人ぐらいの方に見てもらえるものになって十分満足できたのかなという内容のものだとは思っています。

よろしいですか。では、次第の２番目ですね。「平成２５年度事業予定について」、お願いいたします。

【荒木学芸員】　　では、平成２５年度の事業予定につきまして項目別に予定を挙げさせていただきます。

まず、現在閉館中で、先ほど申しましたように今年度の末、３月３０日から所蔵作品展を実施し、今のところ5月２６日の終了を予定しております。その資料の次のページに別紙として企画概要を挙げています。　それが終わりまして、例年６月、当館の構造上梅雨の時期の展示環境が厳しいということで、１カ月少々の休館をとっておりましたが、来年度はそれが少し長くなりそうです。

夏休みに合わせて、７月の下旬から９月の初めにかけて所蔵作品展を実施します。昨年試みた小中学生無料、およびリーフレットの作成・配付を継続したいと思っております。

そして秋、１０月１２日から１１月１７日に、これは当館初めて、単独ではなく他の施設との共同企画による巡回展を実施します。岐阜県立美術館が所蔵の佐藤慶次郎展、まだ正式タイトルは検討中です。この巡回展は財団法人地域創造の市町村立美術館活性化事業によるもので、これに参加することで地域創造から助成も受けられる、そしてカタログの制作、展示会場づくりなど、１館だけではなかなかできないようなことも３館、力を合わせてやっていこうというものです。概要につきましては別紙２として、資料の３枚目の裏表になっております。現在のところこの資料をもとに準備を進めております。既に学芸担当者の会議を３回実施しまして、作家のアトリエ見学、そしてつい先日まで多摩美術大学美術館でたまたま同じ作家、佐藤慶次郎の展覧会をやっておりましたので、こちらにももちろん見学に行ったり、カタログ制作においても多摩美術大学にはいろいろとご協力いただくことになっています。

多摩美術大学の展示のほうは大学美術館ということで、佐藤慶次郎という作家全体に――この人は医学部出身で作曲家になって、そしてそこからオブジェの造形に向かったという変わった経歴を持っているので――包括的に取り上げる展示でしたが、このたび我々が開催する展覧会では、主に電気、磁力や振動で動くオブジェ作品に絞って企画を立てております。多摩美術大に比べるとファミリー向けというかフレンドリーな内容にしていこうというふうに進んでいます。ちなみにこの佐藤慶次郎展は３館による巡回展で、当館が最後になります。

そしてまだ時期が決まっていないのですが、冬に、これも初めての共催企画ということで、多摩・島しょ子ども体験塾の助成による近隣５市の共同事業で、中でも市の交流センターとＮＰＯアートフルアクションとの共催の企画が予定されております。

【事務局（吉川)】　　これについての、詳細は後ほど説明いたします。

【荒木学芸員】　　これを冬に開催しまして、その後にまた今年度と同じように年度をまたぐ形で来年の３月からおそらく５月にかけて所蔵作品展を開催する予定です。

展覧会については以上です。

【鉄矢会長】　　はい。では、続いて教育普及事業のほうも。

【荒木学芸員】　　教育普及事業につきましては、まずワークショップに関しては、来年度は２本予定しております。

まず１つが、今度の改修で完成する２階の多目的ルームのオープニングイベントとしてのワークショップ。これはまだ内容の詳細は検討中ですが、６月から７月の休館期間に実施する予定です。今度の多目的ルームには、絵の具を使ったり、あるいは粘土などを使って終わったら手を洗ったりというふうに、水場ができるということを生かした造形ワークショップを、まず最初にやることで進んでいます。

それから、もう１本は展覧会に関連するワークショップで、こちらは夏休みの期間に開催する予定です。これ以外に、佐藤慶次郎展に絡めて、地域創造からの助成によって何本かのワークショップやトークイベントを現在計画しているところですが、まだ詳細が決まっていないのでこちらの資料には入れておりません。

【鉄矢会長】　　はい、ありがとうございます。

【荒木学芸員】　　鑑賞教室は先ほど報告がありましたように、展覧会の会期中に市立小学校９校の４年生に来館してもらうということで、どの展覧会に何校ぐらい来ることになるかについては、２月に市の図工の先生方と協議する予定です。おそらく佐藤慶次郎展に

集中するのではないかと思われます。

それと、教育普及といいますか、広報といいますか、館の活動を周知するという意味で年報の発行。昨年、開館から５年分の内容で発行しました。この後、昨年度の予算策定においても引き続き刊行するということで予算要求しましたがそれが通らなかったので、では隔年刊行でいくことにしましょうということで話を進めていて今回も予算を要求したのですが、冊子の印刷あるいは送付に関する予算が内示ではゼロになってしまいました。ただ、予算がゼロになっても何かしら記録を公表するということについては、例えばインターネットに載せるという方法もあります。一方で、きちんと冊子をつくってしかるべき機関等に所蔵してもらって、小金井市のホームページを見に来る以外の人にもアクセスしてもらえる手段は必要であると思われます。そのあたりは今後いろいろ検討したいし、委員の皆様からもご意見をいただきたいです。

そして、これも引き続きです。多摩ミュージアム・ネットワーク研究会ですね。こちらは例年、主に年４回の参加館の会議と、そこからウエブを通じた広報と参加館をめぐるシールラリーが主な活動です。来年度体制が変わるということなのですが、引き続き参加して近隣の美術館との連携あるいは交流を深めていきたいと思っております。

【神津学芸員】　たまわーるのシールラリーにつきましては、今年度開催したラリーについては、若干昨年度より増えたというふうにも聞いているんですけれども、まだ研究会のほうで報告が上がっていないのでくわしくは来年度以降になるかと思います。所感、感じた上ではラリーを目指して台紙を持ってきた方が多かったなとは思っております。昨年度、全員サービスにしなかったせいで参加人数が非常に落ち込んでしまったので、今回は集めた人には全員にプレゼントとして、とにかくまず回ってくれる人を増やそうという狙いは当たったのではないかと事務局では話しています。

【鉄矢会長】　多摩ミュージアム・ネットワーク研究会の中で行ってきた、多摩にあるミュージアムを回っていく、たまわーるっていうものですね。

【神津学芸員】　そうです、たまわーるラリーです。助成事業でしたが、今年でその助成は終わりということですので、来年度また少し体制が変わらざるを得ないのですが、各館を回って楽しんでいただこうというコンセプトは変わらないでいこうというふうには研究会の中では話が出ています。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。引き続いて、所蔵作品管理等。

【荒木学芸員】　はい。これは、今まであまり挙げてこなかったですけれども、表に見

えやすい展覧会や教育普及事業とは別に、その下準備といいますか、基礎づくりとして行っている事業を今回全部挙げてみました。

まず作品写真の撮影と、水彩や素描作品のマット加工。マット加工をご存じない方もいらっしゃると思いますけれども、ぺらぺらの紙１枚の作品だけだと取り扱いや保護、保存上に危険だったりすることがあるので、厚紙のマットで作品をはさみ（上の厚紙には窓があいていています)、持ち運ぶときにはその厚紙ごと運ぶようにする。あるいはそれを重ねて保管もできる。作品の保護と同時に、見た目の体裁も美しくするということでそういった加工をします。こういった作品の写真撮影、マット加工の作業は例年休館期間に行っております。来年度も引き続き作品を選定しながら行っていきます。

それと同様に、作品の保護と美観のための処置として絵画作品の額装がありますが、これが２４年度に引き続き、予算要求したのですが認められませんでした。特に昨年度に寄贈を受けた作品の額が傷んでいて、これは収集評価委員会でもまず額をきちんとしてから展示するようにというコメントがあったのですが、それが、展示ができないという状態で現在、止まっております。

それから、貸し出しは今年度に行って、作品返却が展覧会会期中に入ってくる予定になっています。詳細は来年度に報告することになると思いますが、小金井市と福岡県宗像市、中村研一の故郷が協定を結んだ関係で、それを記念した中村研一作品の展覧会をしたいということで当館から作品を貸し出すことになっています。そのほかの作品の貸し出し返却につきましては、先方から依頼があって発生するので、いつ入るかわからないけれども事業としては挙げております。

最後に、目録情報の整備ということで、以前からまず年報と同時に所蔵品目録作成ということも課題として挙がっていました。なかなか冊子をつくるところまでは進んでいないのですが、まず情報を整える。いろいろな段階で間違いがあったり混乱していた情報を整理して、ある程度整ったものは文化遺産オンラインという文化庁が中心に設置しているサイトに情報公開する。一昨年は文化庁からの助成金をいただいて、第１弾として百十数点の作品を公開しました。これをまた今年度、来年度も引き続き行っていこうと思っております。以上です。

【鉄矢会長】　　はい。ありがとうございます。

補足説明等ございましたらお願いします。ありますか。

【事務局（吉川)】　　多摩・島しょ５市連携事業の共催企画のご説明をさせていただきま

す。

多摩・島しょ広域連携活動というのを小金井市と武蔵野市、三鷹市、国分寺市、国立市の５市で構成して行っております。毎年子ども達を対象とした感動体験を提供するという事業で、ちなみに今年は武蔵野市が担当で、井の頭文化園で「わくわくこども動物園 in 吉祥寺」というのを開催しました。

実は、来年度は小金井市が幹事市になりまして、何か良い事業はないかということを担当の企画政策課から問合せを受けました。コミュニティ文化課が芸術文化の担当なので、何か芸術文化の良い事業はできないかということでオファーが来まして、せっかくですので何かやろうかということになりました。実は芸術文化振興計画の関係で、交流センターと美術館とアートＮＰＯのトライアングル連携というのをずっとやりたかったのですが予算的に難しかったので、今回、助成をもらってそれをやろうかということで企画を今立ち上げているところです。

お手元の「五感の森探検隊　冬の空をかけめぐろう！」というのが企画書ですが、企画政策課とも相談してアートＮＰＯに企画を立ててもらいました。内容は、音楽と美術と演劇等々全部体験できる。だけれども、フィールドが小金井市なので、自然とアートを融合させたイベントをやろうというものです。今この企画の段階で、見る人が見るとすごくおもしろいとわかるのですが、助成先にこれを持っていきますと、一体何をやるのとすごく不思議がられて、資料のほうはかなり具体的に写真などを使ってわかりやすいよう、見える化した資料にしているのですが、今までの事業が、どこかの事業体というのですか、イベント会社とかに、ぽんと丸投げしてそのままパッケージングされたような事業、ある意味でとても分かりやすい事業を毎年やっていたのですが、助成元から、今年度以降は地元の企業とか大学とか自治体も全部一緒になって手づくり感のあるものを留意した企画を考えろと言われていて、そこで小金井市が幹事市に当たったものですから、かなり大変という感じは、拭えませんけれども。ただ、ちょうど市の芸文計画の方針としても、行政と地元の企業と大学や、ＮＰＯなどと、協力してやっていく方向性の確立も考えていましたので、チャンスをもらったとも思っており、そのような点でこの事業を成功させたいと思っています。イベントのためのイベントではなくて、この事業を通じて小金井市のいろいろな方面にアクションを起こしていければいいなと考えておりますので、ぜひ成功できるように皆様にもご協力お願いしたいと思っております。

音楽の関係は交流センターでやる予定ですけれども、他に作家を３人程招聘する予定で、

子ども達とワークショップをやって作品を作る予定です。子ども達のつくった作品の展示というのも考えていますけれども、やはりその作家自身も知ってほしいので作家の展示というものもやっていきたいと考えています。その作家の展示のどれかをはけの森美術館の展覧会に持っていきたいと思っていて、交流センターかはけの森とその近辺の自然のある公園などを全部使って、「五感の森探検隊　冬の空をかけめぐろう！」という話ができるようになれば良いということで、今、助成元と調整をしております。９割方大丈夫ではないかというところですけれども、まだ確定ではないんですが、できたら今までにない事業というんですか、催しができるかなと思っています。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。今、平成２５年度事業予定の中で、特に展覧会の部分で書いてある共催企画のところについてお話しいただいたんですよね。私から質問していいですか。

【事務局（吉川）】　　はい。

【鉄矢会長】　　これ、「冬の空」と書いてあるんです。冬になるだろうという予定なんですね。

【事務局（吉川）】　　そうですね。秋口から、真冬になってしまうと公園に行っても多分何も素材になる物が拾えないので、秋口あたりから始めていって、実際発表とか展示が多分冬になってしまうんだろうと。公園でそういうことをやりますので、はけの森美術館の新しくできた多目的ルームがベースになってくるようなことも考えております。

　せっかく実施するので、ぽつりぽつりとやっているのではつまらないので、本年度からちょっと仕掛けをしようとしていて、この３月に交流センターで平成２４年度の芸術文化振興計画の成果展示というものを５日ぐらいやりますが、　鉄矢先生にも済みません、トークのオファーが行っていると思うんですけれども。その中で森の楽団による演奏会のミニミニコンサートをやったりというようなことをちょっと考えておりまして、本年度のうちから一本につなげてできていけばいいと考えてはいます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。では、平成２５年度事業予定についてご質問とかご意見ありましたらお願いします。

【薩摩学芸顧問】　　私は補足説明をする側なのか質問をする側なのか時々よくわからないことがあるんですけれども、説明兼ちょっと確認なんですが。

　今年度で改修工事が大体一段落して、また新たな段階を迎えてくるだろうと思いますが、維持主体の細かなことはともかくとして、やはり美術館というのはある程度の技術をやる

展覧会が中心になるわけですけれども、所蔵作品展はある程度もうノウハウができあがっているのであまり問題はないかと思っております。それから企画展もこの佐藤慶次郎はかなり準備も進んでいますのでこれも問題はないと思うんですけれども、やっぱりこの「五感の森」。これが、ちょっと確認をしたいんですけれども、どこからの援助なんですか。

【事務局(吉川)】　　東京都市長会です、助成が出るのは。

【薩摩学芸顧問】　　幾らぐらいですか。

【事務局（吉川)】　　上限１,２００万なんですけれども、去年までは１０分の１０、１００％出ていたんですが、今年は１０分の１０出なくて総事業費の１０分の８を助成してくださるんですね。残りの１０分の２を５市で均等に負担するということだったんですが、小金井市が会場なので小金井市は少し多く持ちなさいよということになって、小金井市がかなりお金を出すような状況になっております。

【薩摩学芸顧問】　　それで今、実行主体はどこになるんですか。

【事務局（吉川)】　　実行主体は行政側の構成市の小金井市、武蔵野市、三鷹市、国分寺市、国立市の５市共同事業実行委員会。

【薩摩学芸顧問】　　実行委員会ができ上がっているわけですね。

【事務局（吉川)】　　はい。でき上がりますね、これから新しいものが。今準備会みたいな状態になっています。

【薩摩学芸顧問】　　なるほど。実働部隊に、うちの学芸員その他が入ってくる形になりますか。

【事務局（吉川)】　　そうですね。ＮＰＯが主体になってきますけれども、プラス美術館もだし、私たちもそうですよね。

【薩摩学芸顧問】　　この手のもの、いろいろなことを私も見ているんですけれども、さっきちょっと言われたことで、最悪のパターンは行政側が実行主体であってどこかイベント会社に丸投げという最悪のパターンなんですが、そういうものでなくして、ＮＰＯなりうちの学芸員なり、そういう人たちがきちっと入ってつくっていこうとするならば、やっぱりちょっと組織体制がしっかり見えないと多分混乱してくると思うので、場合によってはほんとうに運営委員の方々あるいは私など、どこかに食い込むのか。せっかくやるのでしたらやっぱり１,０００万以上の予算とは大きいものなので、やはり小金井でちゃんとつくっていくものにしていきたいと思いますので、場合によっては私も少しどこかで動ければ動いてもいいというか。

【事務局(吉川)】　　ぜひよろしくお願いいたします。

【薩摩学芸顧問】　　少しこれは、組織体制をちょっと誰もがわかるように図式化する必要があるわけです。

【事務局(吉川)】　　そうですね。

【薩摩学芸顧問】　　それをなるべく早くやっていきたいなと思います。

【事務局（吉川)】　　やはりお金が出るかどうかの確定がなっていないので。

【薩摩学芸顧問】　　ああ、まあね。そうなんですよね。やはりこれがいつも。

【山村委員】　　質問していいですか。これは大体幾らぐらいの予算で、この事業は。

【事務局(吉川)】　　事業全体のことですか。

【山村委員】　　いや、ごめんなさい、今の多摩・島しょの子ども体験塾。

【事務局(吉川)】　　多摩・島しょは１,６００万ぐらい。

【山村委員】　　１,６００万。結構な額ですよね。

【薩摩学芸顧問】　　そうですよ。市立美術館レベルで１,６００万の予算といったら、まあこれはもちろん美術館だけじゃないです、交流センターとか全部入りますけれども、かなりの額ですから。やはりやるならこっちやったほうが。せっかくですから。少し市からマンパワーを結集する必要があるんだと思います。

【村澤委員】　　済みません、質問なんですけれども。ＮＰＯアートフルアクションというのはどのような団体なんでしょうか。

【事務局（吉川)】　　芸術文化振興計画というのが平成２１年にできているんですけれども、それが当初は行政も入った実行委員会の形式でやっていたんですね。計画は、１０年の計画なんですけれども、当初の３年は東京大学の大学院と市との共同研究という形で実行委員会をつくっていろいろ事業をしてきたんですが、その後、計画の第２期では市民主体で動ける団体をつくって計画を推進していくという方向性なので、そこに合わせまして実行委員会､ずっといろいろな展覧会とかいろいろな事業はしてきているんですけれども、その実行委員会が主体となって平成２４年の１月にＮＰＯ法人アートフルアクションというのを立ち上げました。今年平成２４年度から市の芸術文化振興計画推進事業というのをそのＮＰＯ法人に委託しまして、今年は市内の学校の授業の中にアートを入れるという学校連携事業と、あとは市民が企画して現代美術講座をしようというのと、その市民連携事業の今２本立て２つでやっているんですけれども。そこの動きが非常におもしろいということで、東京都の東京文化発信プロジェクト室というところが人材育成だけに関しては予

算を少し出してくれていますので、今共催協定を結びまして、東京都、東京文化発信プロジェクト室、小金井市、ＮＰＯ法人アートフルアクションの３者の共催で今年度の小金井アートフルアクションという通称を言っているんですけれども、芸術文化振興計画推進事業をやっていますという、その主体になっているＮＰＯです。

【山村委員】　　難しいからね。ごめんなさい、確認していいですか。これは芸術文化振興計画事業の中でやることであって、はけの森美術館は会場というか。

【事務局（吉川）】　　これは全然芸術文化振興計画事業ではなくて、多摩・島しょ広域連携活動事業の中なんです。その話なんです。「多摩・島しょ子ども体験塾　５市共同事業」というものなんです。

【山村委員】　　主体は実行委員会なんですか。

【事務局（吉川）】　　そうですね。主体は実行委員会ですね。

【山村委員】　　それではけの森美術館は主体の構成メンバーであり、会場の無償提供であると。

【事務局（吉川）】　　そうですね。場所提供というよりは一緒にこの企画を動かしていきましょうという……。

【山村委員】　　まあ協働。

【事務局（吉川）】　　協働というか、まあ共催相手みたいな感じですよね。

【山村委員】　　共催。ただ、予算的には入ってきていないんですよね。

【事務局（吉川）】　　美術館の予算の中には入ってきていないです。

【山村委員】　　予算概要の数字には入ってこないですよね。

【事務局（吉川）】　　ええ。

【山村委員】　　だから歳入歳出の中にはこの部分は入ってこないということで。

【事務局（吉川）】　　この部分は、うちの課の予算の中には入っています。

【山村委員】　　課として……。

【事務局（吉川）】　　歳出のほうだけうちのコミュニティ文化課の予算の中に……。

【山村委員】　　文化課の予算だよね。だから、この予算概要の中には入っていない。

【事務局(吉川)】　　はけの森美術館の事業とか維持管理とか、その中は入っていません。

【山村委員】　　入っていないということですよね。わかりました。

【鉄矢会長】　　ほかにご質問等ありますか。

別に学芸大学を背負っているわけじゃないですけれども、学芸大学もぜひうまく引きず

り込んでいただけると。

【事務局（吉川）】　　はい。もうほぼ引きずり込もうという……。

【鉄矢会長】　　もともと美術と音楽とはそんなに問題なく引きずり込まれる性格の人たちが多いんですけれども、この「冬の空をかけめぐろう！」というタイトルからなんですが、うちの理科の土橋先生というのが暗黒星雲の全天アトラスを世界で初めて描いた人で、その筋の中ではかなり有名な方らしいですので、そこの助手の方なんかももともと科学館にいたりして星の話とかができる方なので、ほんとうに星の話まで含めてできるのかなというのと、あと学芸大学の中に学芸の森推進機構という、あそこも森にしたいというのと、附属幼稚園も森の幼稚園のように呼びたいという意見があったり、いろいろなふうに森観は持っているらしいので、私がどうぞご自由にお使いくださいとは言えないので、オファーをしていただくとそれ相応の担当者が動くと思いますので。

【事務局（吉川）】　　ひところ森の楽団をこの構成５市の中の大学……。大学って大体森があるよねということで、大学を会場にして外でそういうオープンなワークショップができればいいねというそんな計画もございますので、森つながりでやってみていくというのもお願いに伺えるかと思っています。

【鉄矢会長】　　はい。うまく吸い上げていただければと思います。

【事務局（吉川）】　　もう多分水面下はつながっているのではと思います。

【鉄矢会長】　　はい。済みません、一委員としての意見でした。次、ほかにございませんか。はい。

【上田委員】　　今の「五感の森探検隊」の中の展示のところの質問なんですが、このワークショップに参加してつくり上げた作品をはけの森美術館に展示するというような流れになるんですか。それともこの招待作家というんですか、参加作家を紹介する展示のみをはけの森美術館で展示する形になるんですかね。

【事務局（吉川）】　　まだそこまでは詳細が決定していないんですね。今とにかく会場を交流センターとはけの森美術館との２カ所ということで考えていますので。一番効果的な展示の方法をしていきたいなと思っているのと、子供の作品の展示というのも必ずすると思うんですよね。せっかく呼んだ作家さんの本来の作品の作風みたいなものが展示できないとやっぱりちょっとおもしろくないのでということで、それを絡めてどういう形に持っていけばいいかなというのはちょっとこれから詳細は詰めていかなくてはいけないなと思っております。ですので、はけの森美術館だけでやるのか、市内をうまくつなげてやるよ

うにするのかというのはこれからアイデア出しも含めて、各所と相談していかなければいけないところです。

【薩摩学芸顧問】　　済みません、作家というのは誰ですか。

【事務局（吉川）】　　作家は浅井祐介と村井ケイテツさんと読むのかなあと、物語のほうは藤田貴大さんという方。全体の統括を港大尋さんという方にしていただこうと思っています。

【薩摩学芸顧問】　　それはもう決まっているわけですか。

【事務局（吉川）】　　もう交渉していますので。

【薩摩学芸顧問】　　というか、そういうのを決める責任者というか主体はどこになるんですか。

【事務局（吉川）】　　それは実行委員会です。

【薩摩学芸顧問】　　実行委員会。

【事務局（吉川）】　　はい。

【上田委員】　　済みません、先ほどの質問にちょっと戻りたいんですけれども。この趣旨としては、市民ギャラリーを使ってないというのと、市民ギャラリーの利用と並行にはしたくないというようなことをこの協議会で言っていたと思うんですが、特別なこと、場合というのは設けても構わないと思うんですけれども、はけの森美術館に足を運んでもらってこんなすてきなところがあるんだというのを見てもらうのにすごくいい宣伝のチャンスになるかと思うんですが、そこで市民の人がつくった、子供たちのでもいいかと思うんですけれども、作品を展示するのか、それとも作家だけの展示をするのかというところがちょっと考えどころなのかなと思ったので質問してみた次第です。

【事務局(吉川)】　　おそらくまだこれから話されると思いますけれども、作家と市民の方、参加者とでつくったワークショップの成果としてワークショップの中でそうやって展示というか発表などをしたことはあるんですね。作家にしてみればワークショップをするということが自分の作家活動の一つでもあるので、そこはちょっと市民ギャラリーとはまた違った形で学芸員と作家と実行委員会とも話していければと思っているところがありますので。そういうことでよろしいでしょうか。

【上田委員】　　はい。よくわかりました。

【事務局(吉川)】　　まだ、これから詳細を詰めないといけないところですね。

【薩摩学芸顧問】　　そうですね、ちょっとこれからですね。

【事務局(吉川)】　　確かに場所貸しに見えるのではという懸念は、おっしゃるとおりだと思うので。

【上田委員】　　全部主催のという、新しいことを生む展覧会をしていこうというような感じ……。

【鉄矢会長】　　どうも一番の展示内容が、ほんとうはこの作家の人を招いたワークショップというのが多分展示内容なんだと思うんですよ。リアルタイムで見るのが一番いいという。ただ、それがリアルタイムのは１回しかないのでそれを二、三日見せたいと思ったときに、そのライブ感を映像とその名残のようなものを、人は子供たちの作品というのかもしれないですけれども、それで伝えていこうというような意図であれば、今までもマップを壁に描いたときもありましたよね。あんな格好でというのかなと思って。一個一個の作品が誰々という名前がついてこんなふうにひっかかるものじゃない格好になっていくんでしょうけれども。ただ、内容によってですよね、ほんとうに。物がそんなふうに見えるようなものだと、ちょっと違うものにしてねというのはあるかもしれないですね。

【事務局(吉川)】　　そういう違和感が出ないように美術館と実行委員会ときちんと話ができることが大切だと思います。

【山村委員】　　ちょっと質問していいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【山村委員】　　しつこいようですけれども。これは５市の共同企画。５市、三鷹とか武蔵野市とかも含めてですよね。

【事務局(吉川)】　　はい。

【山村委員】　　それで場所が、少なくとも作品の展示場所ははけの森美術館と小金井市の交流センター、あと野川公園と武蔵野公園とがあるんですが、ほかのところはそれでもいいんですか。

【事務局(吉川)】　　ほかの市がということですか。

【山村委員】　　ほかの市が。

【事務局（吉川)】　　私たちは逆にほかの市にもやりたかったんです。企画としては５市にやりたかったんですけれども、逆に５市としては幹事市のところでやってよという形だったんですね。

【山村委員】　　それはみんな５市の文化課同士でやっているということ？

【事務局（吉川)】　　文化課ではないんですよ。企画のほうなんですけれども。

うちの市でいえば企画政策課です。

【山村委員】　　ああ、市長会と関係あるから。

【事務局（吉川）】　　はい。私たちは実働部隊なので、大枠の話的には企画政策課が窓口になっているということです。

【山村委員】　　なるほど。府中市は入っていないんですよね。

【事務局（吉川）】　　府中市は入ってないです。

【山村委員】　　入っていないですよね。小金井、武蔵野、三鷹、国分寺……？

【事務局（吉川）】　　国立。

【山村委員】　　だから中央線沿線ですよね。

【事務局(吉川)】　　はい。多分府中は府中でまた別の連携をしているんじゃないかなと思うんですけれども。

【山村委員】　　いや、こういう企画はないですね。

【事務局（吉川）】　　今回はたまたまこの芸術文化系なんですけれども、科学イベントをやったりアニメのイベントをやったりピアノコンサートをやったりとかいろいろなことをやっているんですよね。国立が幹事市だったときには、一橋大学の中に古いすごいすてきなホールがあって、ほんとうは何か使えないホールらしいんですけれども、そこでピアノコンサートをやったこともあるんです。

【山村委員】　　今回はコンサートとか演奏会は場所が決まっているんですか。

【事務局（吉川）】　　これですか。

【山村委員】　　ええ。

【事務局(吉川)】　　これはもう場所はとりました。交流センターの小ホールです。

【山村委員】　　ああ、交流センターで。

【事務局（吉川）】　　あとは、ちょっと小さいワークショップに関しては、これから各市の大学とかと交渉していかなくてはなりませんが。最後の発表の場所としては、交流センターを押さえてはいます。

【山村委員】　　なるほど。ありがとうございました。

【薩摩学芸顧問】　　済みません、もう一つ。市民への周知方法はいつもと違うことをやるんですか。

【事務局(吉川)】　　それもちょっと考えないといけないですね。よりよい効果的な方法を模索しています。周知は５市全部やらなくてはいけないと思うので、それはまた作戦を

練らなくてはなりませんね。

【鉄矢会長】　　はい。ではよろしいでしょうか。ほかにご質問がなければ、次第の３、「その他」に移りたいと思います。

次第の３番、「その他」。では、平成２５年度予算内容についてご説明をお願いいたします。

【事務局（吉川）】　　これは、会長、私からやってよろしいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【事務局（吉川）】　　予算概要はそこにお書きしたとおりでございます。ごめんなさい、私が復活要求という予算がもう一つあったのを入れ忘れてしまいました。コインロッカーを入れてくれるということになりまして、はけの森美術館の維持管理に要する経費の中に１０万１,０００円プラスしてください。２５年度当初予算額の６２９万のところにプラス１０万１,０００円が入ります。

先ほどいろいろ予算がつかなかったというお話はあったんですけれども、財政上相当厳しい状況で、実は巡回展の分の予算が切られたらどうしようというのをすごく心配していたんですけれども、どうにかその辺はクリアされました。ただ、今年は緊急雇用の人件費がなくなってつかなくなってしまいましたので、確実に人が１人減るという状況になりましたので、今後工夫していかなければいけないところではあるなと思います。

歳出の下のほうに、２５年度の当初予算額と２４年度の当初予算額を比較するようになっておりますけれども、この予算の増減額のマイナスの部分は、改修のお金がなくなりましたのでその分減ったという形です。あとは、歳入の巡回展の観覧料ですが、こちらも先ほど一番最初に入館者数の話になっておりましたけれども、かなり宣伝をして、この入館料を稼いでいかないといけないというところです。

雑駁な説明ですが、概要なのでそんな感じです。

【鉄矢会長】　　はい、ありがとうございます。ご質問とかご意見ございましたら。では補足をお願いします。

【神津学芸員】　　はい。コインロッカーについてはずっと要望があったことでしたが、このたび市民の方が市長への手紙を書いてくださったことで設置が実現いたしました。今までお預りの荷物で執務中の事務机が全部埋もれてしまうような状態にもなっていて、たびたび話題にも出ていたと思いますが、とてもよかったなと思います。

あとは事業予定のほうで幾つか、予算がつかなかったというものの中で、特に年報に関

して以前の運営協議会でも隔年で出していくべきでしょうと委員の方々が意見を言ってくださったんですけれども、なぜせめて隔年で出さなければならないかという根拠として、人員が変わってしまうからというところがまず大前提でした。担当した人がいなくなった状態で年報の情報をまとめるとなると、ある程度まとめておいたとしてもわからなくなってしまう、それは美術館としていけないだろうということで隔年でというふうにご意見をいただいていたんですけれども、この予算がつきませんでした。実際に私が年限５年目ですので今年で終了で、この２年間でやった展覧会等のデータまとめを緊急雇用で来てくれている松尾に手伝ってもらってやっているんですが、予算としての項目はないけれども、どうにか形にできないかということを、内示が出たら文化課と考えていければと思っているところです。印刷物ですので業者に頼んで作成しますが、デザインは１回目のものを踏襲する形でほとんど新規のデザインが発生するわけではないのでつくと思っていたんですけれども。その他の印刷物に関しては、ずっと学芸大のデザイン研究室に委託していますが来年度の企画展に関しては共同巡回展助成がついているので、こちらは一括で印刷とデザインとを制作会社に頼む方向で進んでいます。官学連携というのは良いことですが、他機関とのやり取りが含まれる企画展の場合質の高いものを目指すとどうしてもお互いの負担が大きく、またもし制作会社に頼んでいればそこから入札なので値段が落ちるんではないかというような提案をしたんですけれども、ずっと認められないままでした。それが助成事業ということで来年度は改善されるんですけれども、じゃあその後どうなるか微妙な不安が美術館の中ではあります。

あと額縁に関して、こちらは展示をする、広く市民に見ていただくという前提でご寄贈くださった作品が全く展示できない状態でまた１年間､ただ過ぎるということになります。少し補足させていただきました。

【村澤委員】　　済みません。年報なんですけれども、どのくらいの予算を予定していたんでしょうか。

【神津学芸員】　　こちらは……。前回は５年分ということと、最初なのでデザイン費や部数も多く５周年記念誌ということも兼ねていたので大がかりだったんですが、今回に関してはほとんど……。

【事務局（山田)】　　年報は５８万要求をしました。

【山村委員】　　２年分で５８万で、印刷費も含めてということですよね。

【事務局(山田)】　　そうです。一括で。

【山村委員】　　もう、ほとんど印刷代ですね。

【事務局（吉川）】　　印刷製本費という名前のついたものは、役所では全部切られています、全部。美術館だけではなくて。

【山村委員】　　ああ。

【事務局（吉川）】　　はい。芸術文化振興計画書の増刷もやりたかったんですけれども、それは切られていますので。

【山村委員】　　それは後ろで、ペーパーレス化しろとかそういう……。

【事務局（吉川）】　　できるだけペーパーレス化しろという話なんですよね。

【山村委員】　　あ、そうなんですか。

【事務局（吉川）】　　でも、難しいんですよね、今はまだ。ペーパーがないとだめという世代の方もいっぱいいらっしゃるので。全部ペーパーレスは無理でしょうというような説明も財政のほうにはしているんですけれども、やはりちょっとその辺は厳しい財政上どこを切るのかというと、やっぱりその辺のところから切っていかないとだめかなという状況です。

【神津学芸員】　　もしその運営についている印刷製本ですとか、展覧会関係の。これもスタートしてからまた額が確定していくので、ちょっと変な話ですけれども節約すれば、もしそのつくれるお金が残ったとしたらつくりたいというような話は美術館の中では出ています。市と相談して、できれば出せるのであれば出したいと考えてデータはそろえていますが。

【山村委員】　　いいですか。意見なんですけれども。この予算でよくやっているなという感じで、ほんとうに運営努力を高く評価します。３,０００万ぐらいの、施設維持管理費含めてこのぐらいの予算で。助成金ね、この市町村立美術館活性化事業助成金は国のほうでしたっけ。

【荒木学芸員】　　地域創造ですね。

【山村委員】　　地域創造は国ですよね。

【荒木学芸員】　　そうです、総務省の外部団体です。

【山村委員】　　だから国のほうから４００万助成金を獲得して、実際そのとおりいくかどうかわからないけれども、入館料収入１００万ちょっとで、また図録つくれないのに図録売り払いって、これは過去の図録ってこと？　３１万５千円は。

【荒木学芸員】　　過去の図録です。

【山村委員】　　過去の図録を売ってということですよね。だから、それで６００万近くということなので努力をしていらっしゃるなと思います。願わくばその印刷物とかは継続的に作ってほしい。これは要するに記録を残さないと歴史にならないわけで、美術館活動というのは歴史をつくっていく、価値をつくっていくということなので、そういう意味では年報とかぜひ研究論文みたいなものも含めて、予算を付けていただくことが小金井市の美術館として将来も継続していく一つの大きな基軸なので、何とか頑張ってそういう残す活動はぜひ続けてください。ちょっと削られているところで何とも言えないんですけれども。そういうのが感想です。

【鉄矢会長】　　私も意見なんですけれども、ペーパーレス化って多分社会的な動きがあって、デザイン学会の大会報告集って今までこんな厚い物だったのが今ＣＤ１枚になっているんですね。そうすると、それをつくるときの呼び名をつくらなければいけないんだと思うんですよ。印刷製本費じゃなくて、もしかしたらデジタルエディット費とかいう、何かこう……。デジタルエディットって何ですかと言われて、決まっているじゃないですかって、何かこう、名前を変えてでもいいから何か記録をするということに対して……。記録費でもいいんだと思うんですよね。何かつくらないとこのままだと、ないですという一番危ない、美術館活動が継続していく中でのほんとうに危機状態になってくるのかなと思っておりますので、じゃあ一体何ていう費用でこれをまとめるのというのをうまく探り出していただいていけるといいかなと思います。

【薩摩学芸顧問】　　ミュージアムの世界はペーパーレスにはならないですよ。もうカタログもやめてＣＤでいいじゃないかという意見が出ては必ず消えていきますので。

【鉄矢会長】　　そうですね。

【薩摩学芸顧問】　　ミュージアムの世界は多分ならないと思います。

【鈴木委員(館長)】　　年報のかわりというわけではないんですけれども、全庁的につくっている事務報告書というのがございまして、そこの中に美術館のどういった展覧会をやって何人入られてというような細かな記録については一応表に出しているところではあるんですけれども、美術館としての年報という部分では予算要求はしたんですが切られてしまったという状況なんですよね。

【山村委員】　　まあ事務報告書は行政としての記録なんでね。結果、美術館活動とはちょっとまた性格が違うんだとは思うんですけれどもね。今、薩摩顧問がおっしゃったとおり、美術館の図録などは全然性格が異なる。

【村澤委員】　　図録は多分無理だと思うんですけれども、何か年報みたいなものがまだ可能性はあるのかなと思っています。特に公開しなきゃいけないというもので、図が入っちゃうと大変なんでしょうけれどもね。

【事務局(吉川)】　　庁内で印刷するんだったらいいよという話なんですよ。だけれども、それは、ちょっと美術館の年報にはそぐわないでしょうね。

【荒木学芸員】　　オンデマンドで１００部ぐらいでもいいから、例えば国会図書館、主要な大学美術館、研究機関に送付する分だけでも作成できればとは考えております。

【鉄矢会長】　　はい、そうですね。ちょっと話が戻ります。２５年度事業予定のほうに「所蔵作品管理、調査・研究」とあるんですけれども、調査研究費というのはこの中のどこかに入っている？

【荒木学芸員】　　企画展準備のための出張費と、企画展のための消耗品費の中で本も買えるというぐらいです。

【鉄矢会長】　　わかりました。それもできるようになったのも皆さんの努力の成果だと思っています。

【山村委員】　　府中市の場合も美術館年報の予算が切られたんですけれども、５年に１回はついているので。そういうこともありますから。

【神津学芸員】　　ただそもそも５年間継続しうる職員というのが……。５年たつと完全に人が入れかわっているので。

【山村委員】　　なるほど。だからなおさらデータとしての受け継ぎとか、それが重要になりますよね。入れかわるということ自体あまりいいことじゃないと思いますが、それにしても美術館のいわば中身の継続ということを考えると、たかが年報というか、研究紀要なんかも含めて受け継いでほしいなと思います。

【鉄矢会長】　　そうですね。ほんとうにそう思います。その他ご意見ございますでしょうか。今ちょっと山村委員からもありましたけれども、年報をぜひやっぱり継続して出せるような環境にしていただきたいというのは、運営協議会としてはそうしたいという意思があるというふうにちょっとご発言をしておいていただけると、議事録に載ってきますので。

【村澤委員】　　やはり記録ですから、活動の記録として、かつ美術ですからやはり写真の部分というかその部分もきれいに。パソコン上で見るというのとはやっぱりちょっと色が違ってくるかなと思いますので、やはりきれいに紙に残していただいたほうがいいかな

と思います。

【上田委員】　　そうですね。同様に思います。単純にペーパーレスといっても単なる記録というのと少し性格が違うのかなと思うので、美術館活動として、きちんとした図録……。図録というんですか、年報という形で残していったほうがいいのではないかと思います。

【鈴木委員(館長)】　　私も理想はそうです。

【鉄矢会長】　　理想はそうですね。ありがとうございます。

　では「平成２４年度の運営協議会、総括等について」というのは、これは……。

【神津学芸員】　　その前に……。

【鉄矢会長】　　あ、ごめんなさい、そうですね。小河内……。

【神津学芸員】　　２枚、左でホチキスどめをしている「小河内文庫の蔵書をはけの森美術館へ寄贈することについて」という資料を出していただければと思います。

　寄贈の話が運営協議会に出ているのでちょっと不思議に思われるかもしれないんですけれども、まず小河内芳子さんという戦前からずっと図書館員として特に児童文学、児童図書について貢献していた方がいっとき小金井に住んでいらして、その方の蔵書をもとにした文庫というのが「ことりのへや」というもので、平成１２年からずっと活動されていたんですが、場所を提供してくださっていたおうちの事情により継続が難しくなったため本の行き場を探しているという話が美術館に来ており、少しご意見をいただきたいです。実際に見に行ったんですが、かなり幅広い児童図書、絵本だけではなく、科学の本もあれば大人も読み込める読み物もたくさんあって、今冊数を数えてリスト化してもらっているところなんですけれども、大体２,０００冊弱だということです。

　なぜ図書館ではなく美術館で受け入れてほしいのかということがちょっと書いてありますが、坂下、実際どういうふうに地域名として言ったらいいのかわからないですけれども、とにかく小金井の南のほうですね。児童館、図書館がかなり遠くにある、子供ひとりでは行くのが少し怖い、もっと近くにあればいいねという地域に、この「こごうちぶんこ　ことりのへや」というのがありまして、この地域からその文庫がなくなってしまうと、そういうふうに子供たちが自由に見られる、安心して遊べる場所がなくなってしまう。家族で年間会員というような形でやっているそうなんですけれども、坂下に置いてほしいという要望が会員からありまして、その中で美術館はどうかというふうに話が出たようです。また個人のお宅にあるよりも公共の場にあるほうがより多くの人に触れるのではないかとい

うこと、小河内さんという方が児童と図書の関係をたくさん研究されてきた方なんですけれども、この小河内さんの思いを継ぐという点からも美術館はどうかという相談を受けた次第です。

美術館としてはびっくりだったんですけれども、美術館としてのメリットを考えたときに共同でワークショップをやるということも考えられるなということと、絵本というものの美術的な価値というものも考えられるのではないかという点がまず浮かびました。ただ、図書館ではありませんので、美術館の職員が文庫で本を貸し出したりするですとか、文庫を開催する人になるということは難しい。運営はそのまま「こごうちぶんこ」のメンバーがするような形、市民と協働してできるような形はないかということを、これから探していきたいと思っています。美術館の理念にもきちんと合わせる形でできないかなと思っているのですけれども、課題としては、やったことのないことになりますので、どういった手続をきちんと踏むのがいいのかということを今、市と相談しているところです。

運協でもぜひ委員の方に意見を伺いたく思います。２階の多目的ルームが来年度にオープンということで、その魅力的なソフトの一つになるのではないかなと思っています。

本をどこに保管しておくのかとか、実際に貸し出しをするとして美術館の窓口に本を返してはいけないというようなたくさんのルールを決めないといけないと思います。実際お客様にしてみたら同じ美術館の中という感覚になってしまいますし、ここら辺の協定というかルールというか、丁寧に決めなければいけない、協定を結んだほうがいいのではないかということなど、文化課と相談した上で美術館としては寄贈はぜひ受け入れて一緒に運営していきたいと思っています。

【鉄矢会長】　皆さん、ご意見……。ポジティブ、ネガティブもあるんでしょうけれども。あといろいろな注意点もある。ポジティブだけど注意点がある方もいらっしゃると思うんですよね。ちょっとそんなことを少しざっくばらんにお話しいただければ。

【村澤委員】　ちょっと以前読んだ本で、『おひとりさまの老後』という東大か何かの先生だったと思うんですけれども、書かれた本があって、その中で出てきたことで、年をとってもひとり身だから、死んだ後、本をどこかに寄贈したいというような考えを持たれる方が最近多いというようなことで、そういうのを市町村で受け入れてほしいというようなことが書かれてあった記憶があるんですよ。受け入れた側としては、多分、特にこれは児童文庫ですから傷むんですよね。その修復をどうするかとか、ほんとうにだめになってしまった本をどうするのかとか、何か今やっていらっしゃる方が入られるということではあ

るんですけれども、そういった本の修復とか修繕というのですか、そういったところをどのように対応するのか、その辺はやっぱり決めたほうがいいかなと思います。

【鉄矢会長】　　はい。ほかに。

【山村委員】　　まず素朴な疑問なんですけれども、図書館のほうでは受け入れられないんですか。

【神津学芸員】　　はい。私も図書館が欲しがるのではないかと思ったんですが、どうやら小金井市の図書館の考え方ではそんなに受け入れるスペースがないということで、文庫のほうから話をしたみたいなんですけれども、ノーだったようですね。先ほどの修理等ということで、確かに子供が読む本なので傷んでくるものではある。美術館でも一冊一冊で寄贈というか項目化するのではなくて、「こごうちぶんこ」という一つの固まりで本全体の寄贈を受けるような形にすることで、廃棄になる本もあればまた新しく、小河内先生のお名前を知っているのでと寄贈の話があるかもしれないですし、一冊一冊のカウントではなく管理できるような形というふうに考えているんですけれども、図書館だと多分それが少し難しいのかなと。

【薩摩学芸顧問】　　ちょっとよろしいですか。この「こごうちぶんこ」の月２回の文庫の開催というのは何をやっていた？　そして何をやらなきゃいけない？

【神津学芸員】　　文庫に来ていい日ですね。それで本を貸し借りできるという。

【薩摩学芸顧問】　　貸し借りというのは、月２回ということは、例えば今日借りたら２週間後に返しに来ると。

【神津学芸員】　　期限を決めていなかったようなので、１カ月の人もいれば１カ月半の人もいたらしいです。

【薩摩学芸顧問】　　なるほどね。でも文庫の開催日に返しに来ると。

小金井の場合はどうなのかわかりませんけれども、最近図書館は、図書館の側からいうととにかく本の寄贈依頼が多くて困っていると。ということで、条件つきの寄贈はまず絶対に受けないですね。それから、どの本をもらってどの本をもらわないかも図書館側が決めると。つまりダブっている場合だってあるんですから。だからその辺がなかなか厳しくて、文庫名をつけて今までの活動を図書館の中でやってくれというような要求はまずどこの図書館も多分通らないと思います。簡単なことを言うと、うちの芸大の図書館も退任の先生が本を寄贈すると言ってもほとんど断られます。要りませんという。

【神津学芸員】　　ただ、文庫というものが図書館と児童館の機能をあわせ持っているよ

うなものだということで、私もそんなになじみがなかったのですけれども、何回か見学に行ったときに、自由にほんとうに本を読む場、選ぶだけの時間ではないというところが重要なのかなというふうに思っておりまして、それが図書館だと少し難しいのかなと考えています。本について話をしたり、工作をしたり、全然話したことのない年代の違う縦のつながりというのを持てるような場所なんだなということを見学に行っていて感じましたので、そういったこともあって図書館ではなくて美術館にということが出たのかなと思っています。

【山村委員】　私もどっちかというと否定的な意見で、大抵博物館とか図書館とか美術館とか、それぞれの設置目的というものがありまして、扱う対象は図書館と美術館ではえらい違いがあって、美術館でもし図書を扱うのであれば美術として展示できる図書、そういうものにしたほうが設置目的に合っていると思うし、情報としての図書と、美術として展示したり見たりすることによって鑑賞できる図書と随分違いがあると思うんですよね。それが一つ、扱いが随分違うということ。

それからもう一つは、ちょっとこれは今ばっと読んだんですけれども、今、薩摩顧問もおっしゃったとおり、寄贈に当たって条件というのは大抵つけないですよね。つけると後で大変になっちゃうので、学芸員の首を縛っちゃうことにも手を縛っちゃうことにもなるので、後々すごく大変になっちゃうんじゃないかというのが一つと、それから今おっしゃったとおり、後々の管理の問題ですよね。これをどのように管理していくのか、一般市民に貸し出しをする場合に公平性がやっぱり必要になってくるので、今までみたいなことり文庫みたいにある程度融通をきかせながらということができなくなってしまう可能性もありますよね。

それから、破損した場合の弁償の問題とかもどうするのか。図書館のほうは細かなノウハウというのはもちろんありますから、そういうノウハウにのっとってやっていかないと何かとトラブルのもとになっちゃうということもありますので。だから慎重に考えたほうが。これを今ざっと読んだ限りではそう思いました。

【鈴木委員(館長)】　例えば学校の図書室とかに……。図書館はなかなか寄贈を受けないという話があったのですが、例えば学校の図書室とかにそういったものという話はなかなか厳しいんですかね。

【山村委員】　全く条件をつけないでいただくのであればそれもいいと思います。もしほんとうに汚れちゃって破けちゃったりした場合に破棄してもいいとかですね。そういう

ことであれば子どもが楽しむ限りは楽しめばと思うんですけれども。それをずっと保存して維持していくということになると、学校のほうでも大変なんじゃないですか。学校図書館の問題ってやっぱりまたあるんですけれどもね。専門の司書がいるかどうかということもあるでしょうし、いろいろちょっと問題が多いんじゃないかと思いますけれどもね。

【神津学芸員】　今月文庫の最後の日というのがあったんですけれども、本を読むだけとか貸し借りするだけではなくて、いろいろなワークショップをやっていたり、本があることによってその場をつくっていくというようなことがあって、教育普及活動の一つとしてというのはありなのかなという想いがあります。

【鉄矢会長】　そうですね。杉並でこういう活動がすごく強かったというのをうちの学生がちょっと調べていて、家庭文庫というのがある時代が、ずっと本が買えなかった時代からの流れであるんだろうなと思っていて、それはすごくこの美術館が個人の家だったというのにはなじむのかなという思いもあります。でも一方で、さっき美術館と、そもそもここの中がもう少し常勤がいたり責任がとれるという……。皆さんがとれていないという意味じゃなくて、何て言ったらいいんだろう、かわっていってしまうところの中で、負担増の中でかわっていったときにとても守り切れないような気がするんですよね。聞いていてそこの怖さはあります。僕はネガティブじゃないです、ポジティブにしたいとは思っているんですけれども、でもほんとうにこの敷地内であってもいいんだろうけれども、建物が切り離されていたらすごくいいような気がするんですね。建物が切り離されていて、全くこれに関与せずにこの緑の庭と何かで、それこそ茶室か何かが……。茶室じゃないですけれども、何か建物があってもここは市のものだよ、そっちのあれは向こうと言って、こっちは美術のほうでというような格好であればすごく切り分けやすいのかなと。それがたまたまじゃあ上下階でくっついている……。

【神津学芸員】　多目的ルームができると受付というか玄関が別になりますので、美術館に入らなくても文庫だけ見ようというようなことはできると思います。

文庫開催日に共催イベントをする以外は、文庫開催日は全く入り口は別でというような形を想定しています。

【鉄矢会長】　僕は多目的ルームというのを聞いたときにちょっと引っかかったのが、筆を持ってびゅんって絵を描きたいときに、ピチャピチャって……。

【神津学芸員】　多目的ルームの中で保管するということは現時点では考えていません。そこは多目的の名の通り、何でもできる空間にして。

【鉄矢会長】　本をどこかから毎回毎回ガラガラ……。

【神津学芸員】　そうですね。ブックトラックなり……。

【山村委員】　大変だね。

【村澤委員】　やはり美術館ですから美術品を保管するのであればいいんですけれども、本をということになるとちょっと違うのかなというのと、１件を認めると次が増えてくる可能性があるので、何で前の人を認めて私を認めてくれないのということになるとちょっとどうなのかな、そこは気になります。

【鉄矢会長】　小河内先生って、これ。

【神津学芸員】　家庭文庫にすごく尽力された方で。

【鉄矢会長】　ですよね。

【神津学芸員】　はい。やっぱり坂下に図書館、児童館がないということをすごく憂慮されていたということで、こういった「こごうちぶんこ」というのができた経緯があるんですけれども、その役割を美術館が担えるといいかなと思って今考えています。なのでちょっと例えは悪いですけれども、美術館で教育普及活動をするときに画用紙とか絵の具とかはもちろんある程度美術館が持っているわけですね。蔵書を消耗品と言ってしまっては悪いんですけれども、そういった教育普及活動のときに使う絵の具用のバケツだってうちが持っているわけで、そういう形で持つことができないかなというのがあります。

あと人員が確かに減るんですね。多目的ルームオープンの年であるにもかかわらず非常にやりくりしてやらざるを得ない。事業自体も来年度はすごくふんだんに予定が入っておりますし、展覧会は全部荒木が担当になっております。確かに美術館自体がきつい状況で、じゃあ教育普及はどうするということを今から相談をしているんですけれども、その中でこの文庫があるよというのは魅力的なソフトになるのではないかと。協力することで、文庫の活動の中で科学のおもちゃをつくったり読み聞かせをしたりということを美術館のワークショップや事業とリンクさせられるのではないかということも考えています。

確かになぜ美術館という部分はもう少し練らなければいけないということと、あと文化課もかなり心配していたんですけれども、協定を結ばないと美術館がだめな日にあけるということは絶対にできないので、そういったことは今から文庫の方と寄贈が実現するかしないかに関わるので話をしています。例えばこの月２回というのも平均して月２回ということはきっと美術館に入った段階で無理だとは思うんですね。美術館が決めるわけですので、２週連続になるかもしれないですし、そういったことも含めてどんなことが考えられ

るのか。問題になりそうなことをどんどん挙げていって可能かどうか考えたいなと思っています。

【鉄矢会長】　私があと聞きたいのは、この「「こごうちぶんこ　ことりのへや」という名前を継続して使用すること」というこの言葉の中にも、すごく意志としてずっと永続的にこの人のことを忘れないでほしいし、こういうふうに子ども達のことを考えるということが大事だったんだという気分を残したいというのがすごくわかるんです。でも基本的に本ってだめになっていくものだと思っているんですね。この気持ちと本がだめになっていくのとがうまく合うかどうかなと思っていて。本をもし消耗品として子供たちが使ってどんどんだめになっていくんだったら仕方がないですね、そのかわり何かどこかの予算で市民が常に補充しますよみたいな話……。何か本が減るんじゃないかなって……。

【神津学芸員】　現在の本も平成１２年から減ったり増えたりずっとしていたものです。実際小河内さんが持っていた本だけではなく、新しい本がたくさん入っていまして、それはやっぱり先生の名前で寄贈があったりとか。精査して入れたり、廃棄にしたりしていて、美術館に入ってしまうと、読めなくなっても置いておかないといけないみたいになるとお互い変なことになるので違うという部分をどうするか。館外に貸し出すとしたらなくなっちゃう場合はどうするのかということも同じことですが、それもご意見を聞きたい。数は変動するけれども、流動的な資料なんだということでできないかと。

【薩摩学芸顧問】　ちょっとよろしいですか。２枚目に、この裏のほうですけれども、「今年度の運協で報告して委員に意見をきいたほうがいいだろう」というのは私の意見だったんですね。つまり、これは寄贈の話ですから本来ならばそちらのほうの委員会なのかもしれませんけれども、ちょっと美術館の運営方針あるいは性格等いろいろな面で絡む部分があるので、これはいろいろなご意見を伺ったほうがいいだろうというのが私の意見だったんです。

ポジティブな部分も実はあると私は思っております。といいますのは、要するに今、中村研一記念はけの森美術館というのは、言ってみれば武器として持っている所蔵品というのは極めて限定された、限られたもので、やはり一つの公立美術館としては決して十分とは言えないと。それから、幸いにしてというかどうかわかりませんけれども、改築工事が終わって多目的ホールというかワークショップというか、一つのそういう空間ができ上がってくると。もともとこの美術館自体がこの家系の、言ってみれば文化、伝統の中でできてきたものを市立にしていったわけで、同じような位置関係にあるものなのでそれなりに

市民とのかかわりで活動してきた文庫であると。それから、うちの活動方針でわかりますように小学４年生が小金井市立の全小学校から展覧会を見に来るという、子どもを今重点に置いた活動。それでこの文庫ということ。それから今、鉄矢先生も言われましたように、もともと個人宅から発展した美術館にそういう家庭文庫のようなものが一つファクターと加わるということも、ポジティブに見れば一つ活動の枠が広がるのかなということがあります。

ただ、私も寄贈とかこういうものに関しての難しさということはいろいろと経験しているわけで、もしもこれを受け入れていくとしたら、やはり協定といいましょうかその辺を、ここで先生方の意見も聞いた上できちっと結ばないと、将来お互いによかれと思ってやったことが争いの種になるというのが一番怖いと思うんですね。ですから、ちょっとその辺をもうこういうのはやるべきではないとしてしまうのか、あるいはもう少しポジティブに考えて条件をみんなで考えましょうとするのか、その辺の方針を決めてある程度方向性を出して、あるいはもう一回、先に協定みたいなほうを我々事務局の側で少し先につくってみると。ちょっとその辺の方向性かなと思うんです。

ただ、美術館の活動の、うまくやれば輪が広がるというか、それは事実ですね。こういうオファーが来て細々とやっている美術館ですので。

【鉄矢会長】　質問なんですけれども、多目的ルームは土足禁止になるんですか。

【神津学芸員】　土足で入るんですけれども……。

【鉄矢会長】　何かこの「こごうちぶんこ　ことりのへや」って、土足じゃないほうがいいだろうなと思ってて。

【神津学芸員】　はい、そうなんです。敷物を持ってきてやったり。実際、以前市内の塾を借りていた時などは敷物を持ってきてくつを脱いで、おもちゃをつくったり何かワークショップをしたりというような活動をしていたそうです。

【山村委員】　これは、本は備品になるんですか、消耗品扱いでいいんですか。

【事務局(吉川)】　備品にはならないですね。１冊ずつが安いので……。

【山村委員】　ですよね。

【村澤委員】　数量としては２,０００冊というふうに書いてあるんですけれども、大体どのくらいの場所になりますか。

【神津学芸員】　畳１畳ぐらいの本棚２つに入るくらいでしょうか。

【村澤委員】　では量的にはそんなにものすごい量じゃないんですかね。

【神津学芸員】　薄い本が多いのであとは全部見えるようにしておかなくてもいいので、２段で収納してもいいと思います。

【鉄矢会長】　さっき下足の話をしたのは、ちょうど、もしあれだったら小金井の持っている、これは坂下ではないんですけれども、やっぱり雨デモ風デモハウスとかあの辺の子ども達と親がのんびり過ごしている場に入るほうがほんとうはすごく動きがいいのかなと思ったりもするんですけれどもね。もちろんここに来て、その人たちが人をこう寄せてくるというのも一つはあるんですけれども、やはり料金の……。一応無料じゃない美術館で動いていますよね。

【荒木学芸員】　休館中のワークショップは基本的に無料です。

【鉄矢会長】　いえいえ、文庫に来た子が何か一緒に絵が見られたらいいなと思うんです、理想としては。文庫に来た子が一緒に絵も見て、絵も鑑賞できてというのが理想なんだろうな。でも、文庫には来られるけど絵を見るのにはお金を取るんだというのはちょっとかわいそうな気がしていて。同じ展覧会なら１回払えばずっと今度は見られるのかとか、いろいろその辺もどういうふうにするのかなというのを……。見せたいなと思うんですよ。

【神津学芸員】　展覧会をやっているときに文庫をあけるとなれば、また相談して、企画としてやると思うんですけれども、そんなに必ず展示を見なければいけないかといったらそれもまたちょっと違うのかな……。

【鉄矢会長】　それは必ず展示じゃなくて。でも何をやっているのって気になると思う。

【神津学芸員】　はい、気にしてくれればいいなと。そういうところから輪が広がるのかなと思っているので。

【上田委員】　この地域で子どもを育ててきた身としては、はけの森美術館にそういうところがあったらものすごく魅力的だなと思います。ワークショップという点で多目的ホールもすごく……。うちの子供も中学生になっちゃったからちょっと時期を外れちゃったんですけれども、すごく期待するというかすてきだなと思っていて、「ことりのへや」ですか、そういうのがあったらいいなと思うんですが、それを入れると今おっしゃったような美術館としてのリンクというのを相当うまく考えないと性格が変わるかなという気がするんですね。さっきちょっと企画の展示はどうするのという同じような質問をしたんですけれども、美術館としての姿というか方針というか、そういうので美術館というたたずまいを守るのだとしたらちょっとそぐわないかなという気がします。ただ、さっきちょっと否定的な意見でそういったようなことを言った感じになってしまったんですけれども、むし

ろこういうものを取り入れて市民の人の作品もあるようなほうが親しんで足を運んでくれるんじゃないかなと基本的に思っているので、うまく考えればすごく魅力的なんじゃないかなと思います。

【鉄矢会長】　　違うものと違うものが出会って、新しい化学反応で今までにない文化が生まれるというのも期待はするんです。でも、前、ちょっとおっしゃっていた、実はこの美術館の中で学芸員より「こごうちぶんこ」に来ている人たちが美術館のことをよく知っている状況も１０年後には起こり得ることですよね。学芸員はどんどんかわっていく。学芸員さんが、これ、どこにあるのかしらと言ったら、こちらの人が、それはあそこにあるのという話になってしまうという格好になる体制じゃない体制に美術館がなっていたら、僕はすごくいいんだろうと思うんですよ。そこがちょっと何かうまく……。ただ、今、学芸の事務局、学芸の中で話し合ってやってみたいという意見の中で検討ができるんだったら検討していいんだろうと思います。全否定しているわけじゃなくて、ただ、さっき言ったネガティブな視点ってどこにあるんだろうというところを今出しているだけなので、出会うと何か期待できるのも感じているのでと思っています。切りがないんですけれども。

【薩摩学芸顧問】　　そうですね。これは、今年度中に黒か白か決定しなければいけない？運営協議会はもう今年度はないですよね。今年度に白黒決めなきゃならないとしたらここで決めなきゃならないわけですけどね。

【鉄矢会長】　　変な、玉虫色な発言なんですけれども。お試し期間ってないんですか。前例のないことをやるんだったら、例えばとりあえず２年やって見直しもあり得るという状況を残しておいて、実際２年間運営してみてよかったらちゃんと受け入れる。向こうにメリットはないですけれども、美術館としてはメリットがあると思うんですよ。

　美術館としてはそれをやってみて、本気で長くもつものだと思って動かしてみる。でも、一度入れたものは普通はノーって言えないんだと思うんですね。向こうの人の顔も見ちゃって。決して悪い人じゃないと思います、多分。顔を見て、子どものことをやっている人はそんな悪い人はいないんで、でもみんなが子どものためによかれと思ってやっていることなので。だけどさっき言った恨みが出ちゃったりするのが一番、それこそ小河内さんの思っている筋じゃないと思うので。

【神津学芸員】　　そのように見切り発車をするよりは、どちらかというとどういうふうに運営していくべきかというのをきちんとすり合わせて、市としてこの文庫の使い方というのを取り決めた上でやっていったほうがいいかなと思います。お試しで見切り発車はち

ょっとできない話かなと。

【鉄矢会長】　　はい。いや、もちろんよく考えた上で、さらにあいたときに、もし問題が起こって解決できなくなったときに、ここでやっぱりって言える……。

【神津学芸員】　　確かに多目的ルームの使い方自体がまだ何も決まっていない。部屋自体が実際に来年度になったときにどんなふうに使うかというのが、まだ今からなんですね。

【鉄矢会長】　　ただ、向こうは今お困りな部分と、受け入れたいという意識もあって、何か生み出そうというところがあるんだと、その両方で……。

【神津学芸員】　　そうなんです。実は２月中に本の行き場所を決めないとならないということでちょっと急ぎでいろいろ考えているようなところがありますね。ただ、できればですけれども、来年度の夏の展示ぐらいまでには何とか多目的ルームの使い方が、実際に運営をしていったところで見えてきていると思いますので、そのときに文庫を再開するような形で寄贈を受けることができないかと。そこまでに協定の内容をどんどん詰めていって、あらゆる問題点を項目化していければいいかなと思っているんですけれども。

【薩摩学芸顧問】　　だから、いつまでに白黒つけなきゃならないかということで、応じますけれどもとにかくこのまま美術館をずっと見てきて、やっぱり一つ新たな要素が加わることはいいことだとは思う。それがうまくいけば積極的に幅が増えると思うし、これもわりあい近くで地道に活動してきたものですので、次から次へとじゃあこれを受け入れるんだから俺の蔵書も受け入れろというような連鎖反応にはそう簡単にはいかないと思うんですね。ただ、私がやっぱり心配しているのは、きちっと決めるところは決めておかないと、両方でこんなはずじゃなかったということになって、せっかく幸せにやっていこうと思ったらけんかになっちゃったということが、実は美術館はいろいろあるんですね。寄託作品のときの条件をきちんと決めておかなかったがゆえに大もめになったとか、いろいろなことが実はありますので、どうしたら……。会長、これ、協定みたいなものを先に考えるということはできますかね。

【鉄矢会長】　　ちょっと時間的に余裕がなさ過ぎるのかなという気はするんですよね。２月中ということですよね。当然これは我々だけの判断で決められるものでもないでしょうし、実際に……。

【鈴木委員(館長)】　　やっぱり理事者の判断とかもあるでしょうし。一応こういうたたき台をつくったんだけどもどうでしょうかというようなことで、判断を仰ぐ必要があると思うんですよね。

【事務局（吉川）】　　いいですか。ちょっと最初考えていたのは、本の行き場がないということなので、とりあえず市に寄贈を受けて本はお預かりしましょうと。でも実際その本の動かし方については、先ほどから何度もお話が出ているように、かなり練って練ってデメリット、メリットをはっきりさせて、練った上でゴーというんですか。ほんとうにそれが協定書を結んでいくのかどうなのか。でも多分協定書が一番いいんじゃないかなと思っていますけれども。そういう形で、１月に文庫が閉まったからじゃあ次すぐ４月からスタートとかというような形ではなくて、お互い納得したところでゴーにしたほうがいいんじゃないのという話はちょっとしていたので。

館長とも、確かに今、委員さんの意見を聞いていたら、なるほどそういうデメリットもあるのか、なるほどねという私も今すごくいろいろ感じたんですけれども、ただ教育普及という形で美術館の理念には全部当たっていることですし、こういう市立の小さな美術館の新しい試みとしてやってもおもしろいのではないかいうことと、やっぱり小河内さんの蔵書であったものが来るということが、すごく市の美術館としてもメリットなのではないかということ。美術館に合うか合わないかという話はあるのでしょうけれども。あとはそれをうまく運営していければ、やはり市の方針の市民協働という形の面ではとても前向きな活動にはできるのかなと思うんですけれども。先ほどからいろいろ心配されている運営がうまくいかなくなったときにどうするかと。なるべくそういうふうにならないような形に方策をよく練って立てていかなくちゃいけないと。あとは館長が言っていましたけれども、受けました、こういう方策で市民の方たちと一緒にやっていきますけどどうでしょうかということは、市のトップのほうにやはりその話は持っていかなくちゃいけないなと思いますので。

【山村委員】　　ちょっと委員の１人として言わせていただければ私はやっぱり反対で、最初から断ったほうがいいと思います。いろいろ後で詰めればいいとか、協定書を結べばいいとか、そういうふうに楽観的というか、あとはそれで何とかなるでしょうみたいなことでやっていくのはやっぱり反対ですし、それから教育普及の理念というのは非常に重要だということはよくわかるし、地域の美術館、それから市民協働ということもよくわかるんですが、はっきり言ってあまり大きな美術館ではないから、これが中心の一つになっちゃう可能性があるんですよね。そうすると美術館本来の目的、まだその目的が十分達成できる体制ができていない。中村研一の資料を生かしながら中村研一の理想みたいなものも中に抱えながらやっていくというところからこれは多分外れることだと思うので、そうい

う意味からしても相当慎重に考えたほうがいいと思います。短期的に判断すべきじゃないと思うし、とりあえずということでもないだろうと思います。

それから、先々のことを考えても、絵本とか児童文庫ってほんとうにたくさんあるわけで、また流行とか淘汰されていく部分も相当あるので、果たして将来の子供たちがこれをほんとうに楽しんでくれるかどうかということ。消耗品としてほんとうに使っていくんだったらどんどん更新していけばいいので、そういうサイクルをつくればいいわけですけれども、それはまた児童書を専門にやっている司書の人とかやっぱりその分野に詳しい人がいるべきだと思うし、いろいろな意味からも私はやっぱり反対ですね。それはちょっと言っておきたいと思います。

【神津学芸員】　　先程も申し上げましたが、これは一応寄贈という形の申し出でしたので、この運協で出た意見というのをふまえて、再度市と相談するという形でよろしいでしょうか？

【鉄矢会長】　　はい。

【薩摩学芸顧問】　　だた、その前にちょっといろいろともう少し協定の内容とか、最終的には理事者判断にまでなるのかどうかとか、詰めなきゃならないとは思いますけれども。でもいずれにしても、今ここで白黒の決着は出ない。

【鉄矢会長】　　出ないですね。

【薩摩学芸顧問】　　またその場でもないので。ここはご意見をお伺いする場ですので。

【鉄矢会長】　　はい。

【神津学芸員】　　美術館としても、あまり具体的に、じゃあ開館しているときどういうふうな流れになるんだろうとか、どういった企画が考えられるんだろうとかを考えていないので、そこもあわせてもう少し……。

【薩摩学芸顧問】　　これはもうちょっと次の収集の委員会までに今のご意見を踏まえた上で、もう少し具体的に詰めていったほうがいいような気がします。場合によってはちょっと私、協定の内容を文書でまた、動きますよ。多分山村さんもそうでしょうけれども、こういうことというのは現場でも随分経験がありまして、我々もつい最近、我々のものだと思っていたものが戦前からの寄託品だということがわかって、子孫が出てきて持っていかれちゃいました。５０年間もうちの収蔵庫を使ったあげくの果てに。そういうようなこともありますので、きちっとやっておかないととめられないようなことになりますので。ただきちっとやる努力をまだ続ける必要はあるかと思います。

【鉄矢会長】　　そうですね。あと気になる点とか、補足……。

【上田委員】　　いいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【上田委員】　　せっかく今ちょっと終わりかけたのに蒸し返しちゃうんですけれども。これはそんなにすごく大変なことにしなければいけないのかというのがとても疑問なんですが、多目的ホールでイベントをやるに当たって、定番のワークショッパーというんですか、ワークショップをやる人の候補が出たというような考え方ではいけないんでしょうか。置いておく場所がないということで、寄贈という形にしなくちゃいけないのかとか、よくここでワークショップをしてくれるんだったら場所を、ここに置いておいてもいいよという形で……。２畳分ですか。本棚２つ分ぐらいだったら、置けるのであったら置いておいてもいいし、このワークショップというもの自体が１０年後、２０年後成り立たなくなっていくなら、そこでそのときさようならというのは言葉が悪いですけれども、流れに合わせて「こごうちぶんこ　ことりのへや」というワークショップはもう誰も来ないので終わりですというふうにできるような、そういう気軽というのは何なんですけれども……。パッケージングのようなことです。

【薩摩学芸顧問】　　それも含めて可能なんですけれども、今ここにある寄贈に当たっての条件が意外に厳しいんですよ。つまり「「こごうちぶんこ　ことりのへや」という名称を継続して使用すること」。これをそういう協定を結んじゃったらこれはもうこれから２０年後も３０年後も５０年後もこの協定が生きるわけですよ。

【山村委員】　　これはもう動きがとれないですよ。

【薩摩学芸顧問】　　それから、文庫の運営は月２回の開催と。当面は今やっていらっしゃる方々が多分やってくださるでしょうから、当面は続くと思いますけれども、その方々の後継者が育たなければ、この月２回の実施、開催ということが不可能になる可能性もあるわけです。それから本自体が消耗で傷んでくる場合があるし。それから最後、「美術館のプログラムで文庫を使用する際は文庫側に一報し」とかね。

【山村委員】　　「一報し」ってこれも重要ですよ。必ず一報しなければいけないのかという。

【神津学芸員】　　済みません、これはむしろ美術館は貸し出しをしないということで、私がまとめた際に向こうがすごく要求しているみたいな文章になってしまいましたが、館外に貸出すという部分が美術館として難しいので、そこにはタッチしないけど美術館も使

うよ、という……。

【山村委員】　　いや、だけど、もし行政がこういうことを認めちゃったら自主的にできなくなっちゃうんじゃないの。

【神津学芸員】　　いや、むしろ美術館が自主的にも使いますよという意味合いが強くなるはずの文言でした。

【山村委員】　　だったら協定にしないで勝手に使えばいいんだけどね。

美術館の自主的運営を担保する意味であれば、文章がちょっと間違えたということですね。

【神津学芸員】　　はい、そうです。まだこちらでも、方向性が定まってない面も多く未整理な文章でした。

【山村委員】　　今、上田委員がおっしゃったように、これは条件がなくて単なる消耗品としてご寄贈いただけるんだったらありがたくご寄贈いただければいいと思います。「こごうちぶんこ」という単なるプログラム名であればいいですね。

【神津学芸員】　　そうですね。使っていくものとしての絵本と、協力しあっていくプログラム名として。

【薩摩学芸顧問】　　今、ここで決定する場所ではありませんので、これだけご意見伺いましたので、ちょっと私ももう少し頭をひねりますので、ということにしてください。

【鉄矢会長】　　はい、ありがとうございます。

では、「こごうちぶんこ」についての意見交換は終わったということで、「平成２４年度の運営協議会、総括等」についてというのは。これは、２４年度の運営協議会は今日で一応終わりですね。

【事務局（吉川）】　　ざっくばらんにこの４回の感想などを述べていただければいいかなというくらいでいます。

【鉄矢会長】　　わかりました。８時を過ぎて申しわけございません。今のいろいろな意見もありましたけれども、踏まえて意見を委員一人一人からお聞きして、ご発言いただいて、また次年度に生かすようにしたいと思ってということですね。お願いいたします。

【村澤委員】　　１年間の感想といいますから、たしか去年の今ごろだったと思うんですけれども、論文を書いて選考いただいたわけなんですが、この美術館の運営というものに初めてというか、こういう市の協議会というものに初めて参加させていただいて、市の行政というのはどうやってやっているのということがかいま見えたといいますか、それにか

かわることができて勉強にもなりましたし、自分自身としてもこの美術館のために少しでも役に立ててよかったなと思っております。また来年も任期ということですので頑張りたいと思います。よろしくお願いします。ありがとうございました。

【上田委員】　　とにかくよく知らないのにいつも素人考えでがんがん発言してしまって申しわけないなと思いつつ、地域の主婦視点、お母さん視点で話せばいいのよというふうに先輩の委員の方にアドバイスをいただいたこともあって、これからもいろいろ勉強しつつもその視点で感じたことを言っていければいいかなと自分では思っています。もう１年ありますけれどもがんばりますのでよろしくお願いします。

【山村委員】　　小金井市のはけの森美術館にかかわらせていただいてもう１年近くたつのかなと思っていまして、だんだんと活動とか中のいろいろな悩みとかそういうことをお聞きしているうちに大分愛着が湧いてきました。また鉄矢会長さん、委員長さんとか学芸員の皆さんとか薩摩顧問の書いたものを読ませていただいたり、また中村研一のことについてもちょっとずつ学んできました。もちろん以前からも知ってはいましたけれども、絵だけではなくて書いたものとかも知っていくうちに愛情がだんだんと湧いてきたので、ほんとうに学芸員の神津さんなんか５年という大変残念なことだと思うんですけれども、学芸員でやっていらっしゃる方はものすごくそういう気持ちがあると思うんです。そういう学芸員の気持ちがこの小さな美術館がいいものになっていくベースだと思うので、もちろん任期とか雇用期間とかそういう問題はあるんでしょうけれども、それが継続されるような、さっきも同じことを言いましたけれども、受け継ぎというのを展覧会の記録なり、あるいはデータでもいいし、あるいは何でもいいんですけれども、方法を考えていただいて、先ほどＣＤとおっしゃった、あるいはホームページとか、そういう形で情熱の受け継ぎみたいなものができるような、そういうことがほんとうに必要なんですね。それはネット、ホームページを使ってもいろいろやれると思うんですけれども。あるいはそういう今はやりのフェイスブックとか、そういうメディアもあるんだと思うんですが、そういうものをどんどん表に出していって、理念としての小金井市のはけの森美術館はすばらしいというふうにいろいろな関係方面から思っていただいて、また実質も今の力量の範囲ですごく一生懸命やっているという評価がされるようになればいいんじゃないかと思っています。あと１年の中で何かお手伝いできることがあればと思っていますのでよろしくお願いします。

【鈴木委員(館長)】　　今年度、新しい委員さんに就任をしていただきまして、斬新でさまざまなご意見をいただきまして運営する側としてほんとうに厚く御礼を申し上げたいと

思います。非常に厳しい環境ではございますけれども、できる範囲でこの小さな美術館の個性を皆様にご理解いただけるような形で、今後につきましても事業展開していくことができればいいなと思っております。まだまだ開館間もない美術館でございますけれども、皆様のご指導、ご鞭撻いただきながら一歩一歩成長していけるような美術館でありたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。以上です。

【鉄矢会長】　　委員長を務めさせていただきまして何が一番大事なのかなというのは、形だけで会議が進むんじゃなくて、皆さんの意見が自由に出せるという場をどうやってつくれるかということで、済みません、私も行き過ぎた発言をしたり誘い水をするような発言もあったかもしれませんけれども、生き生きした委員会が開けていたと思っています。またぜひ来年度もその生き生きした委員会でいきたいと思っています。

学芸員の神津さんが一応任期満了でもう再任がないということなので、ご苦労さまでした。神津さんのおかげかなと思うのは、ほんとうに子どものワークショップがたくさん生き生きできたり、表現が適切かどうかわからないんですけれども、時々おちゃめな企画を真面目にやってくれるというのが、この小さな美術館だからできる伸び伸びしたところがあって、それは非常に外から見ていて美術館がみずみずしく見えました。ぜひこの小さな美術館だからできるということと、そういうみずみずしい活動が今後も続くことをぜひ支援できる立場にいたいなと思っています。

それから専門である中村研一の企画展も私もできてからずっと見ていることになりますけれども、ほんとうに研究という格好で、あ、こういうふうに見るんだという中村研一の絵が何枚あるんだろうってあまり知らないのに、何かいつもこれ前も見た感だけれどもこういう見方をするとこういうふうに見えるんだなと勉強させていただいています。そういう意味では先生のおっしゃったように愛着が……。今、中村研一を非常におもしろく見ています。あんな焼き物だけの特集とかやっていただいても、ああ、そういうことなのかと思って見たり、ほんとうに美術館としてのスポットの当て方が、いい当て方をしていただいているような気がして、ぜひ今後とも次年度も１年間また委員をやるのでよろしくお願いいたします。

【鈴木委員(館長)】　　先ほど鉄矢先生からもお話がありましたけれども、学芸員の神津と緊急雇用で今年度いっぱいという任期だったんですが、松尾学芸員が任期満了で一応卒業という形になりますので、一言ご挨拶を。神津さんのほうから。

【神津学芸員】　　では座ったままで失礼いたします。びっくりされた委員の方もいらっ

しゃるかと思うんですけれども、開館して以来初めて５年の年限、満期ということで今年度をもちまして退職いたします。１年更新の年限５年というのが定められておりまして、ずっとそれではまずい、美術館というのはそういうものではないという話が運営協議会でさんざん話されてきたことだったんですけれども、結局その事務も学芸も非常勤という状態は変わらず５年目を迎えました。ただ、大変充実した、ほんとうに先ほどおちゃめというふうに鉄矢会長が仰っておられましたけれども、こんなのはどうだろう、ここの美術館にはこれが合うんじゃないかというような発想が色んな切り口で実現できるような美術館だからこそ形にすることができた５年間だと思っております。ありがとうございました。これからもはけの森美術館とは、何かでかかわれたならと思っています。

【薩摩学芸顧問】　いろいろな形で戦力になってください。こちらも声をかけますので。

【神津学芸員】　ありがとうございます。（拍手）

【鈴木委員(館長)】　では、松尾さん。

【松尾学芸員】　７月１日からお世話になりました松尾と申します。文化遺産オンラインというサイトに作品をアップしたり、研一さんの生前持っていた蔵書を整理したり、そんなような仕事をしてまいりました。至らないところもたくさんあったと思いますが、先輩のお２人を中心に受付の方、事務の方、いろいろな方に支えられてやってきました。ほんとうに感謝しております。ありがとうございました。（拍手）

【鉄矢会長】　では、次回は次年度、年度あけの予定で、５月ぐらい？

【事務局(吉川)】　展覧会を見ていただいたほうがいいですね。今度の展覧会が５月２６日までです。

【鉄矢会長】　はい。では火曜日、２１日。

【事務局(吉川)】　多目的講義室のお披露目になるかと。

【鉄矢会長】　５月２１日、１８時３０分、美術館のほうで。その他何かありますでしょうか。

なければ、平成２４年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会を閉めさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

―― 了 ――